

## コメント

会田 弘継

近藤先生、菊池先生どうもありがとうございました。大変勉強になる、素晴らしいプレゼンテーションだったと思います。お二人のお話を受けて私から若干、論点の提起をさせていただきたいと思います。

近藤先生のお話で近代のもつ問題点、近代 400 年、産業革命が始まってから数えれば 200 年の歴史、西欧とその他、アメリカも含めてどういう状況になっているかというお話には、やや二元論的なところがあったような気がして、そこにもう少し複雑さがあるのではないかと考えます。まず宗教に対する対応について。ヨーロッパとアメリカではずいぶん宗教に対する考え方が違う。アメリカでは大統領の就任式に聖書が用いられるように、宗教が近代の中に入りこんでいる。近代における宗教とは何か、フランスの場合は「ライシテ」の問題とか、特にフランスでみられる非宗教性—これは「世俗性」とはちょっと違うようですが—、宗教的なものを公的な場から排除していく姿勢はアメリカと、どうしてこうも違う近代があるのか、と考えさせます。もう一つ、近代植民地の国々との間で植民地化されたことの怨念等々の問題が出てきました。近代化したヨーロッパ、アメリカの側でも、内部においても近代に対するさまざまな問いかけがあって複雑な様相になっている。ロマン主義の問題や、日本で言えば「近代の超克」の問題があるわけです。今でも近代をめぐる論争は行われていて、それが近代の一つの特徴でもあるような気がいたします。再起的近代、近代というのは自己をコレクトしていく、どんどん自己を修正していくんだと、今度のような問題にぶつかりながら、そうした近代性の一つの重要な特徴を考えさせられました。

あの事件をめぐるフランスで 300 万～400 万のフランス人がデモや集会に集まったわけですが、これは「シャルリー・エブド」の表現そのものに同意したということなのか。疑問があると思います。集まった人たちの中には多くの種類の人たちがいた。とりあえず「ジュ・スイ・シャルリー」と言ったが、それはいろんな意味が込められていたのではないか。一部の人はその表現に同意していたかもしれないが、多くの人は言論の自由は根源的な価値であり、我々の自由への価値である。これから近代化していく国にとっても重要なんだと、そういう問題を強く意識していたのではないか。

近代の普遍主義の問題が出てきましたが、「ライシテ」の問題をとっても全然、普遍的ではない。アメリカの宗教性を考えても、それは分かる。世界中の報道を見てみた場合、フランスが行ったことに対して、さまざまな反応があり、多文化的—これも近代が行っている作業の一つですが—多文化的な色合いをもった体制の国々、アメリカ、カナダ、オーストラリア、アメリカ型の近代の国々はさまざまな戸惑いを持ちながら、言論・表現の自由の問題、宗教の問題、近代への悩みを深めていった。今回の事件で、そのことが浮き彫りになったと思います。

さらに私が提起したい論点。「言論・表現の自由」というのは実はいろんなものに取り囲まれている。こういう仕事についている者として「言論・表現の自由」に対するテロ、暴力による弾圧は絶対に許されないものだというを前提に申し上げるが、実は「表現の自由」をさまざまなものが取り囲んでいる。もともと自由とは他者の自由をおかさない限りにおいての自由だ。それが、近代自由主義が始まった時から根本原則だったと思います。つまり個人の自由は他者の自由によって、まず一つ枠組みをはめられている。その後に、さらにさまざまな枠がはめられてきた。一つは「公序良俗」というもの、たとえばここで「火事だ」と言って皆さんを大混乱に陥れることは「言論の自由」の概念の中にどう置かれるか。公序良俗の問題、名誉棄損の問題、法的に制限される問題がある。ヘイトスピーチの問題もある。ヨーロッパにおいては反ユダヤ主義の言論の問題が言論の自由の周りを取り囲んでいるわけです。フランスの場合は宗教、人種、民族、国籍、障害、性的指向の問題を含めて、すべてそれに対して名誉棄損をしたり、憎しみを煽ったりするものは禁じられている。アメリカはフランスの法のあり方に対して極めて厳しい目で見えています。これが果たして近代の「表現の自由」が進んでいく道なのだろうか。さまざまなものに取り囲まれていることは認めながら、「表現の自由」はこれからどういう形をとるべきか、問い掛けている。空気による自己規制もあって、イラク戦争に進んでいくアメリカのメディアで大きな問題になった。日本でも竹内洋先生、京都大学の社会学者が「大衆抑圧社会」ということを言われますが、近代社会、我々の社会に起きている現象がある。アメリカの場合は法的な問題ではなく、「ポリティカル・コレクトネス」ということが問題になっている。フランスでは「ライシテ」の問題で宗教と表現の自由はどうかねあうのか等々、それらが大きな問題として「表現の自由」を取り囲んでいる。「表現の自由」は近代の絶対的な価値の一つですから、これらのものがどう緊張関係を保ちながらいくのか、境界線を確認しておかないと我々はいられない。特にこの仕事につく者は。境界を曖昧にしておくと、どんどん圧力が押し寄せてくることを言論の内部にいて感じる。常に緊張状態をつくっていかないと言論を扱う者は大きな恐怖を感じることがあります。これが一つの大きな問題で、言論の自由に

ついて。

今回、浮き彫りにされたのは「ライシテ」の問題です。「政教分離」と「表現の自由」の関係はどうなるのか。近代の二つの革命はフランス革命とアメリカの独立革命ですが、フランスの政教分離はアメリカのそれとはまったく別の形をしている。フランスの政教分離は「政治の中に教会が入ってくることを防ぎたい」。逆にアメリカは「教会の中に政治が入ってくることを防ぎたい」—自由に信仰したい、自由に教会が動きたい、だから政治が入ってきてほしくないというのがアメリカです。ベクトルが逆の形で政教分離がある。アメリカと似たような国々とフランスの間で今回の事件をめぐる根源的な論争が起きているように思います。これが「ライシテ」の問題、非宗教性の問題が絡む。アメリカでは、無神論者が自分の権利をどうやって認めてもらえるかということが問題となるほど、フランスとある意味で逆の形の状況がある。今回、浮き彫りにされた政教分離の問題は、このように大きく分けて二つある、それをどう考えたらいいか。

もう一つは、あのムハンマドの絵は宗教の尊厳の問題なのかどうか、きちんと問い直した方がいいと思います。本当の信仰者は自分の身の回りで起きている自分の宗教に対する一種の雑音は気にしないわけです。あれは果たして信仰が絡んだものなのか、そうではないのではないかという問いかけを試みる必要もあるのではないかと。事件と宗教を直ちに結びつけてしまうことの危うさを若干、感じます。あの風刺画が宗教の尊厳をおかしたのかどうか、そのことをもう一度きちんと考えてみる必要がある。新聞が絵を載せるかどうか、メディアが報じるかどうかについて大きな意味合いをもつことをどう考えるか。果たして本当にそうなのかどうかを、我々は判断すべきで、そこにもう一つ重要な報道の役割がある。それを報じないこと、掲載されないこと、リプリントされないことに対しては極めて懐疑的な視点をもっています。

日本の問題ですが、今のような議論が、ほとんどなされないまま、多くの新聞が「シャルリー・エブド」の絵を載せなかったことは極めて残念だったと思います。載せない判断の理由をしっかりと、今、あげたような論点も含めて読者に提示すべきだったのではないかとというのが現在の私の結論であります。この後、皆さんから意見をいただいているいろんなことを学んで帰りたいと思っています。以上がコメントです。